2025年10月31日 VOL. 20

研究統括センター

ニュースレター

ユーアールエー
URAとは？

リサーチ・アドミニストレーター
（University Research Administrator）

文部科学省では、研究開発内容について一定の理解を有しつつ、研究資金の調達・管理、知財の管理・活用等をマネジメントする人材として、大学等における研究マネジメント人材（リサーチ・アドミニストレーター：URA）の育成・定着に向けたシステム整備等を行っています。

URAは、研究者および事務職員とともに、研究資源の導入促進や研究活動の企画・マネジメント、研究成果の活用促進など、様々な業務に従事する人材であり、現在、日本医科大学、日本獣医生命科学大学にはそれぞれ３名のURAがいます。

今回は研究統括センターの業務を兼務している、知的財産推進センターの室員とともに、日本獣医生命科学大学のURAの先生方へのインタビューを行いました。

内容

日本獣医生命科学大学
URAインタビュー

日本獣医生命科学大学
小林　史幸　准教授
落合　和彦　准教授
鈴木　亮平　講師

知的財産推進センター
前根　恵美子

インタビューを終えて

URAとしての役割認識と意欲

これまで先生方には、発明発掘や発明相談の際に同席をいただき、ご意見や助言をいただいてきました。また、弁理士による特許調査や市場調査に関するレクチャーなどもご経験をいただきました。

- URAとしての現在の役割をどのように捉えていますか？

私たちは、教育者・研究者・URAという三つの立場を兼ねており、他大学でのいわゆる専任URAとは、役割が異なってくると考えています。

その中で、研究者や開発者の目線から発明発掘や発明相談に携わり、また、発明者としての経験も活かしながらURA業務に携わることが一つの役割と考えています。

一方で、これまで知財の分野への関心がなかったところに、URA業務に携わることで、自分自身の勉強にもなりました。

- 大学の研究活動において、URAが果たすべき最も重要な役割は何だと思いますか？

法人内には研究成果を権利化し、社会に還元するための部署として知的財産推進センター（以下「知財センター」）があり、また相談できる弁理士の先生もいますので、法人内で研究シーズを活用する体制は整えられていると思います。

その中でのURAの役割は、研究者が気軽に相談できるような環境づくり、またその研究成果を活かすために知財センターや研究推進課といった産学連携部署へ繋ぐことがあると考えています。

また、学内には、URAの存在を知らない先生もいらっしゃると思いますので、そうした先生が何かを思いついたときに気軽に相談できる存在になれば良いと考えています。学内の多様で専門性の高い研究をしている研究者に対して、こちらから働きかけをすることで、シーズを持っている研究者への刺激、あるいは発明を生み出すための橋渡しの役割があると考えています。

日本獣医生命科学大学URA
小林 史幸 准教授
応用生命科学部　食品科学科　食品工学教室

発明発掘・研究支援について

-知的財産推進センターとの連携として、発明発掘のヒアリングに同席して感じたこと、印象的だったエピソードはありますか？

研究者とのヒアリングの際、活用できそうな研究シーズがあっても、すでに発表をしてしまっていたケースもありました。

一部の研究者は、研究成果の権利化や活用に関心が薄い場合もあるため、そうした研究者への働きかけが重要だと感じました。

一方で、研究成果の権利化を目指すのではなく、学会発表を優先し、広く研究成果を発信していきたいという研究者もいらっしゃいます。

ヒアリングを行った研究者に対して、権利化を目指すのか、あるいは学会発表を優先させるのか、その選択肢があることを提示し、知ってもらったことは良かったと思っています。

-知財センターでは、URAとの連携を通じて、どのような事を感じましたか？

発明相談の中には、専門性の高い分野もあることから、URAの先生方に同席をいただくことで、専門家の目線から意見をいただけること、また、知財センターの室員とは違った角度から意見をいただくことができることは非常に良かったです。

今後もURAの先生方との連携を推進し、学内での研究シーズの発掘や育成、活用を行っていきたいと思います。

- 先生方ご自身も研究者ではいらっしゃいますが、研究者とのコミュニケーションで難しさを感じる場面はありますか？それをどう乗り越えていますか？

発明相談や発明発掘の際に、弁理士の先生にも同席をいただくことがありますが、弁理士の先生がすべての分野を網羅することは難しいため、URAが専門性の橋渡し役として機能できたと感じています。とはいえ、分野によってはかなり専門性が高くなること、また日本獣医生命科学大学は獣医学部、応用生命科学部の２学部があることから、研究領域も広くなり、その知財戦略におけるコーディネートに難しさを感じることもあります。
ただ、今現在、日本獣医生命科学大学のURAは、臨床領域、食品領域、そして基礎研究領域の研究者が担っているので、そのバランスは良いと感じています。

日本獣医生命科学大学URA
落合 和彦 准教授
獣医学部　獣医学科 獣医衛生学研究室

- 発明や研究成果の発掘において、今後強化したい支援は何ですか？

知財関連では知財センターによる支援を受けることができますが、研究の担当部署として研究推進課が大学内にあることから、知財センターと研究推進課との連携をより強めることで、研究者に対する支援もより良くなっていくのではないかと感じています。気軽に研究者が発明相談をできる環境にしていければ良いと考えています。

- 以前、知財センターの室員が研究室訪問を行い、研究者の先生方に研究成果や知財化に関する案内を行っていました。研究者と直接話をしていく中で、新しい研究シーズを見つけられるようなこともありました。

研究者自身から能動的に動くにはハードルが高いので、積極的に研究者に働きかける活動を行うことで、研究者自身も気づかなかったシーズの発見や、研究者自身からシーズの相談をしてもらえるようになるのではないかと思います。

これまでに知財化、あるいは研究成果の発信に関心を持っていなかった研究者に対しては、学内での研究発表の場を利用するような方法も有用であると考えられます。その際、学会発表を行うことで、新規性が失われるといった知財化に際して注意する事項も一緒に紹介できると良いと思います。ただし、研究者もマルチプレイヤーとして業務を行っている中で発表をしてもらうこと自体が難しいと感じる研究者がいると思うので、何かしらのインセンティブがないと、発表にポジティブでない研究者が多くなるかなとも思います。

時間を割いてでも発表を行いたいと思えるものがあるといいかもしれませんが、まずは研究者訪問といったところからスタートしても良いのではないでしょうか。

外部発信への取り組み

-研究成果を社会に発信する取り組みとして今年はアグリビジネスフェアへの出展が予定されていますが、そのほかに情報発信の取り組みとして考えていることはありますか？

研究成果の発表の場としては、学会が一番身近なのではないかと考えています。

大規模な学会から小規模の学会まで様々な学会が開催されることから、このような場での発表を行っており、学外への発信は決して少ないとは感じていません。

日本獣医生命科学大学URA
鈴木 亮平 講師
獣医学部　獣医学科 獣医内科学研究室

研究成果の発表の場としては、学会が一番身近なのではないかと考えています。

大規模な学会から小規模の学会まで様々な学会が開催されることから、このような場での発表を行っており、学外への発信は決して少ないとは感じていません。また、学会発表の中には、知財化を意識した発表の仕方もあり、研究者の中でも知財化への関心の高い研究者もいます。ただし、学会への発表を行わない研究者もある一定数はいると思います。

イノベーション・ジャパン※といった知財全般に関する展示会に出展することでの技術移転先や共同研究先を探索することも一つのツールとして考えられます。研究には市場化が見込まれるものから高度な専門性を要するものまで幅広く存在するため、分野に応じて適切な情報発信の場を選ぶことが重要であると感じています。

また、研究者に対しても、学会のみのならず、広く情報発信をするような場があることの情報発信も行っていけると良いと思います。

今後の活動への期待と展望

- URAとして、今後どのような活動を展開していきたいですか？

今年の１月には、大学内ベンチャーの規程も制定されていることから、法人としての研究成果活用の方針を明確にすることが、URA活動をさらに推進する上で重要ではないかと考えます。

※イノベーション・ジャパン
全国の大学等機関から創出された研究成果の社会還元・技術移転を促進すること、及び、実用化に向けた産学連携等のマッチング支援を実施することを目的とした日本最大級の産学連携催事

-URAとしての活動を通じて、個人的に達成したい目標はありますか？
あるいは、今後の活動への意気込みなどをお聞かせください。

日本医科大学との情報やノウハウの共有を行うことで、日本獣医生命科学大学の研究の活性化にもつながると思いますので、URAとしてそうした活動を行っていきたいと考えています。例えば、医療分野では、大きな臨床研究の1つである治験関連について、日獣大動物医療センターではそのような環境整備や実施件数がまだまだ少ないため、研究統括センターの治験支援部門による治験の広報活動や支援活動といったところの協力も今後に得ることができればと思います。

その他にも、特許を得ることのメリットをもっと周知できればと思います。

特許は商業化だけでなく、競争的資金の申請にも活用できるため、こうした情報を積極的に発信していきたいと考えています。また、基礎研究の領域であっても、その先に社会的貢献があることを意識していただき、URAとしてもその後押しをしていければと思います。

-本日は貴重なお話をありがとうございました。

インタビューを終えて

今回は、教育者・研究者でもあるURAの先生方に、これまでの活動で得られた経験や、今後の活動に必要なこと、課題などについて率直なご意見を伺いました。

日本獣医生命科学大学における研究シーズの発掘・育成、そして権利化を通じて研究成果を社会に還元するためには、日頃からの情報発信や、研究者が気軽に相談できる環境づくりが重要であると改めて感じました。

研究統括センター事務室としても、URAの皆さんの活動を今後さらに支えていけるよう、努めてまいります。